理想の光

三島稲門会
会長　森田眞覧

学問の独立という理想は大隈重信が東京専門学校創立に際して標榜し、建学の実務を担った小野梓が明治十五年十月二十一日の開校式で高らかに宣言した正に早稲田精神の真髄である。越えて明治四十年十月二十日、大隈銅像の除幕式を兼ねた創立二十五周年祝典の時、我が早稲田大学校歌は制定された。祝典の夕べ校友、教職員、学生らに依る提灯行列大行進の折「都の西北」は初めて大合唱されたと云う。相馬御風の荘重な名歌詞は諸外国の校歌を参考にした東儀鐵笛が精魂傾けた名曲を得て、「都の西北」は早稲田の魂と成り今や全国津々浦々で愛誦される国民歌謡となった。

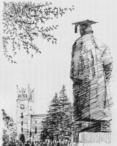
而うして校歌の一番から三番までの共通詞として用いられている唯一つの歌詞が「理想」である。大隈重信は大言壮語、或いは性急尊大にすぎると批難されつつも天下国家を論じ続けた。その所以は高遠な処に理想を追い、常に有言実行を旨とした信念からである。福沢諭吉が実利の学を説き、それを慶応義塾の使命とし幾多の俊秀を育成したことは衆知の如くだが、大隈は青年の燃ゆる眼を高き視点、拡き視野に導き、国家の開拓者の養成を理想とし、慶応と共に明治日本の両輪たらむと認識していたからであろう。

政治、経済、言論と現実の中に理想を追いつつ、早稲田大学は文学、演劇、映画、古典芸能と巾広い分野で夢追い人を輩出させた。早稲田に学んだ者は、大隈老侯、先達の夢を追って行かねばならぬ。如何なる皇の下にも理想の光は燦然と輝いている。

【㈱森田商店代表取締役会長・一九六五年商研修】

VOL.12
2015

稲門三島



表紙スケッチ画/河辺和年元会長（1937~2013）

早稲田大学校友会三島稲門会誌

発行者：早稲田大学校友会静岡県支部三島稲門会長　森田　眞覧
発行所：早稲田大学校友会三島稲門会「稲門三島」編集委員会
〒411-0035 三島市大宮町２・16・４青木興業㈱内
TEL. 055-916-3101・FAX. 055-916-3071
e-mail：kazu@aokico.jp
印刷所：NAPO 株式会社

生涯現役

三島稲門会
次期会長　益原章生

早稲田を出てから五十四年、今年七十七歳の喜寿を迎えます。今も元気で仕事にゴルフに現役で頑張っています。早稲田一筋の我が人生、ご恩返しの意味で三島稲門会次期会長の大役を担う事になりました。元気だけが取り柄の私ですが、二年間お付き合いの程よろしくお願い申し上げます。

私は広島県の、瀬戸内海に浮かぶ高根島で、みかん農家の次男に生まれました。野球が大好きな少年で、縁あって大阪の市岡高校へ進学しました。甲子園に夏十二回春九回出場の名門校です。三年間下宿生活で、厳しい練習の野球と勉学との両立に打ち込みました。憧れの早大第一政経に入学後、早速野球部に入部し連日厳しい練習に明け暮れましたが、肝心の授業に出られない事と実力差を実感し二年間で退部しました。しかしながら友情の絆は切れる訳がなく、懐の深い稲門野球倶楽部はＯＢとして認めてくれました。なんと有難い事でしょうか。伝説となったあの早慶六連戦は四年生の秋の快挙でした。輝かしい歴史の瞬間に出会えた事は学生時代の最高の思い出です。卒業後明電舎に入社し、名古屋で約十年間モータ発電機を売りました。商売の真髄を学び一大決心をし、二人の乳飲み子を連れ新天地沼津で静岡キュノ販売を設立しました。幾多の荒波を乗り越え今年四十六周年を迎えます。ワセダ進取の精神と職の独立を地で行きました。

今ＮＨＫの朝ドラで「マッサン」が放映されていますが、私も少年時代からマッサンと呼ばれていました。三島のマッサンとして、いつまでも元気で生涯現役笑涯楽習の心意気で頑張り続けたいと念願しております。

【静岡フィルター販売（株）代表取締役・一九六一年第一政経・経卒】

投稿のページ

話勢多

WASEDA

喜寿雑感「大らかさ」

諏訪部　敏之

早稲田出身で三木武吉という大物議員がおられました。社会党の議員が、国会で「先生は、妾が3人も居るそうだが、国会議員として恥ずかしくないのか」と詰問したところ、三木議員が「失礼な！3人ではない5人居ます」と答えましたら、議事堂内が爆笑となり、詰問した議員も笑いながら追及を止めたそうです。三木議員、詰問した議員、国会議員全体の大らかさは今では考えられません。

少し前の話として、民主党の野田佳彦総理大臣が国会解散をやりました。選挙になれば民主党が敗れることは分かっていた筈ですが、党内がばらばらの民主党では、日本が崩壊するとの判断の下での決断ではなかったかと私は推測します。この決断こそ滅私報国と反骨精神を含めた大らかさの表れと言えると思います。

これ等二つの話で何を言いたいのかと申しますと、早稲田出身の政治家には、共通して大らかさがあるということです。敢えてもう一つ付け加えるならば、散り際のきれいさも挙げられます。これも大らかさです。老醜をさらけ出してまでも権力の座にしがみ付くといった政治家は、早稲田出身者には見当たりません。

このように政治家に代表される早稲田のスクールカラーは、民間でもよく見かけられます。例えば、大企業の中には、何々閥といったことを言われる企業がありますが、早稲田閥の会社というのは聞いたことがありません。また、細かい例としては、私が元勤めていた会社で、職場の懇親会と社内の同窓会の懇親会の日がぶつかった場合、早稲田の卒業生は職場を取りますが、他校の卒業生は同窓会を選ぶということを経験しました。そこにも早稲田マンの大らかさを感じます。何となく殺伐としている今こそ、早稲田の大らかさが最も望まれる時だと痛感します。

喜寿の思い、若い人に通じますかな？

【丸善工業㈱代表取締役会長　一九六〇年商卒】

わが懐かしき学生時代

土屋　文雄

前回こちらに寄稿したのは六年前、ちょうど稲門会の県大会が三島で開かれた時だった。「わが愛しき三畳半物語」として、部屋が狭いあまり扉から入るとしばしば天井から突き出ていた半畳の押し入れに頭をぶつけたことだけ書いて終ったので、今回もう少し補足します。

その下宿は青梅街道と早稲田通りの交差点を僅かに新宿寄りの商店街の一角にあった。裏が淀橋消防署で表通りの程近くに青果市場があった。一階は雀荘で横がコインランドリー、一日中色々な雑音の絶え間ない場所だった。私のいたその二階の下宿は部屋が十程あり、近所のお年寄りに聞くと戦前女郎衆の置屋ということだった。

夏は暑いので、よく窓をあけ目の前の民家の瓦屋根で横になって涼んだ。たまに近所の銭湯に行くとときどきてんぷくトリオの戸塚何とかという太った俳優がひっそりと体を洗っていた。

大学へはいつも下駄履きで徒歩で通った。卒業前しばしば学友と酒を飲んだ。赤レンガ、兼六寿司、鳥銀、etc.馬場の駅前のパール座で安い映画を沢山観た。

大学は文芸科だったが英語に興味があったので英文学研究会に入っていた。D・H・ローレンスの輪読などをした。同人雑誌を作り、しゃかりきに評論や小説めいたものを書いた。

大隈講堂前の竜のからまった図書館にもよく通った。ときどきイエーツの大家で大正末葉から研究書を出されている尾島庄太郎先生が文献を調べにこられていて、温厚至純な威厳を放っていた。地下の休憩室に行くと英語だけのディベートをしている学生もいて感心した。

文芸科の授業で強烈な刺激だったのは何と言っても保昌正夫先生の授業だった。先生は早稲田の生え抜きで戦時中横光利一に心酔し一生その研究に専心していた。授業も気迫が漲っていた。ある時先生は言った。「子供は馬鹿でも作れる。君達は相手を早まって選ぶな。」それを真に受けたわけでもないが、私は当時同じクラスの最愛の可憐な女性に声もかけず終ってしまった。

九年前娘が偶然早稲田に入学し三十数年ぶりに伊豆から上京し、娘と一緒に当時の下宿を探した。高層ビルばかりだった。

【一九七四年文卒】

良きかな早稲田

杉澤　正人

二年前、知人の教育関係者に要請されて、中学校の非常勤講師を引き受ける事になった。その際、教員免許の更新手続きが必要となり、必修講義を受講したのだが、その講義科目の中に「博物館学」というものがあった。その中で「博学連携」という言葉を耳にした。実は学生時代、教員よりもむしろそちらの方面に強く惹かれていたので、一念発起、「学芸員資格」の取得に挑戦する事にした。

必要講義単位は放送大学で取得し、今夏、母校早稲田大学会津八一記念博物館での学芸員実習を残すのみとなった。

猛暑の八月後半から九月の第一週にかけて、全三週間、午後一時半から六時二十分までぎっちり組まれたスケジュールは、体力と根気の勝負であった。とはいえ、暑さと時間的制約の状況に関してはそうであったのだが、精神活動の方面はまさに喜びと興奮の毎日であった。

何と言っても、実際の博物館で展示実習ができるという喜びは大きい。また完全な「学生生活」にどっぷり浸かるなどという事も、この様な状況にならない限り、まず考えられない事である。

展示実習以外には、刀剣の鑑賞、拓本、裏打ち、軸装、茶道具の始末、和綴じなど、三十年振りの学生生活を満喫する事ができた。

文学部スロープのメタセコイアの背が伸び、泰山木も二回りほど大きくなっている。大隈記念タワーの校友会サロンに立ち寄り、大隈庭園を直下に見下ろすという経験もした。

夢の時間は一瞬の間に過ぎてしまったが、大隈講堂の鐘を日に三度聞き、若い学生達に交じってキャンパスを闊歩するのは快感であった。懐かしくもまだ新たなる我が母校。

早稲田、良きかな！

【行政書士　一九八〇年二文卒】

早稲田大学会津八一記念博物館で展示プレゼンテーション実習中の杉澤さん

白黒の3号館

角田　顕一朗

二〇一四年夏、政治経済学部の新校舎が完成しました。新しい3号館は地上十四階建て。かつての3号館の面影を残した、最新の設備を擁するビルだそうです。一九三四年に建てられた旧3号館は、私が大学3年生だった二〇一一年に解体工事が始まりました。

入学前に初めて訪れたとき、阪急の車両みたいな茶色の塗装は剥がれ落ち、まるでスクラップ車両じゃないか…と思いました。寒い。暗い。古い。こんな校舎で大丈夫だろうかと不安になりました。

本部の3号館がそんな状況なので、政治経済学部の講義は1号館、10号館（語学用）、15号館（大教室用）と古い建物ばかり。法学部生や商学部生を羨んだものでした。

一方で、四階の古い学生読書室に立て籠もったり（窓を開けると小鳥が飛び込むらしい）、入ゼミの説明会があったりと、思い出深い校舎でもありました。他の校舎にはない、壁にしみこんだ時の流れが、5万人の早大生の一人に過ぎない自分に居場所を与えてくれるような場所だったのかもしれません。

あるとき、白黒の3号館が唐突に脳裏に浮かびました。いつ見たかも思い出せず…。NHKスペシャルだったか…。東大の安田講堂、京大の時計台に続いて映っていた3号館。中央の大隈講堂、左奥の1号館、右の旧図書館とともに、白黒フィルムの中にある建物でした。

これを思い出したのは、「芸術論」のときでした。3号館402教室。大隈講堂側の通りに面し、アーチ型の柱が顔を出す、最上階の大教室。私にとって唯一の3号館での講義でした。多くの卒業生が眺めた光景に自分が溶け込んだのか、それとも早稲田を愛する教授の話がきっかけになったのかはわかりません。あまりに気になって、講義のあと、中央図書館（野球グランドであった頃は知らない）でノートパソコンを開き、インターネットでうろ覚えの映像を探し出しました。

その映画は「学徒出陣」でした。舞台は一九四三年。3号館は一九三四年築。明治神宮外苑競技場での壮行会の前のシーン、出征学徒の母校が映し出されていく中に、3号館はありました。この建物は、八十年前から、多くのことを刻んできたのだと…。そのとき、早稲田の歴史の深さと重さを感じずにはいられませんでした。

今の早稲田には、私が最後の世代として学んだ3号館はもうありません。寂しくもありますが、かつての3号館が多くの学友の姿を見守っていたように、新3号館が、これから早稲田で学ぶ人々の思い出の場となればと思っております。

【㈱Z会　二〇一三年政経卒】

襷で繋ぐ早稲田の絆

～箱根駅伝の歴史～

小池　亜由美

この原稿を執筆したのは十月末。少しずつ冬の訪れを感じている今日、年始に向けて待ち遠しくなるものがあります。それは1月2日、3日に開催される『箱根駅伝』。皆さんがこの記事を読まれるときには、すでに二〇一五年の結果が出ていることでしょう。中学・高校と陸上部に所属していたこともあり、箱根駅伝を見なければ私の新たな年は始まりません。

今回は、早稲田大学の箱根駅伝における歴史を振り返るとともに、皆さんに駅伝の楽しさを伝えられればと存じます。

箱根駅伝が初めて開催されたのは、一九二〇年。早稲田大学はこの第1回大会から出場しています。出場回数は八十二回で、中央大、日本大に続く第3位。優勝回数は中央大に次ぐ第2位の十三回となっています。第3回大会で初優勝を果たした早稲田大学は、その後も中大、日大と優勝争いを展開しながら、優勝回数を重ねてきました。順調に箱根駅伝を歩んできたように見えますが、実は『駅伝有害論』を唱え、不参加となっていた時期も……。選手の故障を懸念したため、と言われています。その後箱根駅伝に復帰した早稲田大学は、かの有名な瀬古利彦選手の入学等を経て、一九八四年、八五年には、2年連続優勝を飾るなど、輝かしい記録を更新してきました。しかし、一九九三年に優勝後は、十七年間優勝を飾ることはできず……。苦しい時期を乗り越え、二〇一〇、一一年に2年連続で涙の優勝を飾りました。

駅伝の魅力は、一つの襷を繋いでいくことにあります。襷を繋いでいくのはその年の1区から10区まででではなく、その襷は来年の1区へ……と繋がっていくのです。つまり、あの早稲田大学の襷には何十年にわたる思いが込められており、まさに駅伝は早稲田大学の絆を繋いでいるということができます。皆さんもぜひ来年は駅伝をご覧になり、早稲田の絆を実感してください。

【㈱Z会　二〇一四年商卒】

高校時代、陸上部で活躍していた小池さん

三島稲門会とワタクシ

川渕　健二

あれは一昨年の十一月の、ある金曜日のことだった。午後一時半から「旬彩さん太」で飲み始め、二軒目の「三楽」に移動したのは五時過ぎだっただろうか。三軒目の「京路」へ行ったのは八時過ぎだっただろうか。「だっただろうか」と書いたのは、一昨年のことだから記憶があやふやになっている、わけではない。一昨年のその時点でも、「だっただろうか」と書いたであろう。つまり、一軒目で相当できあがってしまっていたわけである。なにせ、翌日、「三楽」へ行ったのを覚えてなかったぐらいですから。しかし、「京路」へ行った記憶は、翌日、おぼろげにあった。かつ、「京路」で、その日初めて会った人たち、別グループで来ていた人たちと、楽しく会話をしたような記憶があった。あれは、なんだったんだろうなあ。以下、翌日の我が家での会話。

「おい、ゆうべ、京路で話した人たちいたよな。誰だっけ？」

「え？　覚えてないの？」

「ハズカシながら……。覚えているのは楽しかったことだけ。なんか名刺は何枚かあるんだけどさ」

「うん、名刺交換してたから」

「で、誰だっけ、この人たち？」

「三島トーモンカイっつってたっけ。早稲田の卒業生の集まりだってさ」

「トーモンカイ……稲門会か！　へー、三島にもあったんだ」

「あなたさあ、カウンターで落ちてたのに、あたしたちが『へー、みなさん早稲田なんですか』て話してたら、急にガバと起き上がって、『おれも早稲田です！』とか叫んじゃって」

「覚えてません……」

「『二月に総会あるけど、来る？』って言われたら、『もちろん行きますよ～』なんて答えちゃって」

「覚えてません……」

「『へー、編集の仕事してるんだ。じゃあ会報の編集手伝ってよ』って言われたら、『任せといてください！』なんて答えちゃって」

「覚えてません……」

「『へー、会社に早稲田卒の若い子いっぱいいるんだ。じゃあ引っ張ってきてよ』って言われたら、『任せといてください！』なんて答えちゃって」

「覚えてません……」

週明け、青木さんからメールが届く。

「総会の日程はこれこれですので、よろしく」

かしこまりました。

小西さんからもメールが届く。

「会報の編集業務、ぼちぼち引き継いでいくので、よろしく」

かしこまりました。

小島さんからもメールが届く。

「若い子も引っ張ってきてね～」

かしこまりました。

そんな経緯で、三島稲門会に参加させていただくことになりました。みなさま、よろしくお願いいたします。

【㈱Z会　一九八九年一文卒】

会報「稲門三島」原稿募集中

会員投稿ページに原稿をお寄せ下さい。ご希望の会員は三島稲門会役員にお申し出ください。（編集部より）

2014年度の行事

■三島稲門会2014年度の活動■

1月15日　三島稲門会役員会（青木興業）

2月1日　三島稲門会2014年度総会（みしまプラザホテル）来賓・講話等詳細は別記　出席31名

3月8日　早稲田大学代議員会

4月4日　静岡県東部校友会拡大役員会（静岡市クーポール会館）

4月22日　静岡県東部校友会役員会（富士市　割烹いま里）

5月17日　静岡県稲門祭（沼津稲門会主催）（ホテル沼津キャッスル）三島稲門会より18名参加

平成26年度早稲田大学校友会静岡県支部大会
静岡県稲門祭懇親会

県稲門祭・鎌田総長（中央）を囲んで

6月10日　三島稲門会役員会（ザ・仲次郎）

8月2日　新人歓迎会（ザ・仲次郎）第一部映画鑑賞（「ローマの休日」「早稲田大学」）第二部懇親会　新人3名総勢20名

新人歓迎会・20代男女の参加で盛り上がる

9月27日　早稲田大学代議員会

10月3日　三島稲門会役員会　役員改選　次期会長に益原現副会長選出他　詳細別添

11月21日　三島稲門会忘年会（割烹　松韻）出席34名

12月20日　沼津稲門会忘年会（ホテル沼津キャッスル）

（青木代司一記）

忘年会も盛会でした

三島稲門会　総会14

■三島稲門会　総会2014■

平成26年2月1日、17時からみしまプラザホテルにて、三島稲門会総会が行われた。

総会は、小島健昭幹事長司会により森田眞覧会長が挨拶。

来賓として早稲田大学校友会静岡県支部長三輪俊城校友（沼津稲門会会長）が紹介された。本年5月17日に静岡県稲門祭が沼津稲門会の幹事により開催が予定されている。

議事に入り、会務報告は幹事長が、会計報告は井出雅光会計幹事が務め、本年度の活動計画も含め了承され終了した。

17時30分から三嶋大社宮司矢田部正巳校友（58文）による「三嶋大社について」の講話があった。伊豆一宮でもあり源頼朝が旗挙祈願をされている由緒ある歴史を踏まえた地元稲門にとって大変興味深いお話を伺うことができた。

引き続き懇親会が青木代司一事務局長の司会、柳田重雄校友の乾杯で行われた。来賓として真野浩之沼津稲門会事務局長の参加もあった。（総勢31名）

出席者・南方甫、足立光弘、矢田部正巳、和多善之、柳田重雄、小野惇一、菊地信廣、久保田滋也、益原章生、森田眞覧、石井登喜男、木村幹雄、小西政司、田口義昌、井出雅光、伊奈玲子、青木代司一、土屋研二、小島健昭、浦上健、新井祐二、川渕健二、松浦啓子、宮原渉、高城大亮、野口浩毅、永田廣幸、齋藤真子

（小西政司記）

（「早稲田学報」6月号より転載）

ホームカミングデー

■2015年度ホームカミングデー■

ご案内対象卒業年次（予定）

①（卒業50周年目）1966年（昭和41）

②（卒業45周年目）1971年（昭和46）

③（卒業35周年目）1981年（昭和56）

④（卒業25周年目）1991年（平成3）

⑤（卒業15周年目）2001年（平成13）

⑥①～⑤と同期入学で卒業年の異なる方

⑦①～⑤の年および今年推薦校友になられた方

＊開催は2015年10月18日（日）の予定で、詳細は8月上旬に大学校友のウエブサイトに掲載の予定。

（早稲田大学校友会より）

三島稲門会　役員14

●顧問＝萩原　健（51理工）・中川和郎（56文）・八木　傳（56教育）・足立光弘（58商）●会長＝森田眞覧（65商研）●副会長＝益原章生（61政経）・田口義昌（67政経）・小西政司（67商）●幹事長＝小島健昭（85法）●会計幹事＝井出雅光（72理工）●幹事＝堀江辰男（63教育）・榎本昭雄（65理工）・木村幹雄（66商）・土屋比都司（68商）・長倉春生（69教育）・杉澤正人（80文）・渡邉明彦（04社会）・永田廣幸（06教育研）

●事務局長＝青木代司一（79理工）・事務局次長＝飯島　映（01理工研）

事務局便り

■年会費納入のお願い■

本会の2015年度年会費を銀行振込でご送金下さるようお願い申し上げます。

・年会費　3，000円
・振込先　静岡銀行　中島支店
・口　座　普通0450431
・宛　先　早稲田大学三島校友会
　　　　会計　井出雅光

編　集　後　記

「みしまコロッケ」なるものがある。例のドラマの影響もあり、今やすっかり全国区である（多分）。先日は、三嶋大社で「全国コロッケフェスティバル」なるものまで開催された。

その翌朝、新聞でフェスティバルの記事（なんと全国版！）を読みながら、コロッケで町おこしねえ、微妙だなあ…と思っていたら、最後に「え？」となった。「みしまコロッケの会」の会長さんが、なんと今回寄稿もしていただいている諏訪部敏之さんだったのである。いやあ、コロッケで町おこし、アリでしょう！ちなみに私、同じようにコロッケで町おこしをしようとしている富山県高岡市出身です。

（川渕健二記）

■『稲門三島』編集委員会■委員長＝小西政司（67商）・副委員長＝川渕健二（89文）・委員＝小池亜由美（14商）